# 超絶で最狂の三人が幻想入り

yousyun1996

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超絶で最狂の三人が幻想入り

【Ｎコード】
Ｎ３３９２Ｘ

【作者名】
ｙｏｕｓｙｕｎ１９９６

【あらすじ】
宇宙人を倒し、早一週間が経った。だが、運命は彼等に安らぎを許さない。訳のわからない世界に連れて来られ、困惑する三人…優、茜、アントニオン。彼等は無事に帰れるのか？その前に生きて居られるか？スーパーバトルアクションコメディ　（パロディ有り）超絶最狂学園の続編です。ゆっくりしていってね！東方のキャラが崩壊してるかもです。気をつけて下さい。

## 第０話　事の始まり。（前書き）

こんにちは。初めまして。
今回続編となる、東方の幻想入りを入れた、
超絶で最狂の三人が幻想入りを見ていただきありがとうございます。
訳ワカメな方は超絶最狂学園を見ていただく事をオススメします。

## 第0話　事の始まり。

異世界にて

？「・・・」

？「お嬢様、どうしましたか？」

？　（何か壮絶な運命を感じるわ…）

？「じゃあ、少し出かけるから、結界の方、頼んだわ。」

？「はい…」

？「なぁ、何か今日の天気、おかしくないか？」

？「さぁ、私にはいつも通りにしか感じ無いけど…何がどうしたの？」

？「私には不思議でしょうがないんだぜ。」

？「そんなに言うなら原因を探しに行けば良いじゃない。」

？「面倒だから行かないぜ！」

？「何よそれ？」

そして…

スーー

？「さてと、今回は…ちょうど良いのがいたわ。〇〇学園ねぇ…しかも三人…ウフフ…面白くなりそうだわ。」

～第1話に続く～

## 第０話　事の始まり。（後書き）

次回は第１話です。
東方を知っている方はいろいろ教えていただけると大変嬉しいです。

# 第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り（前書き）

どうも！こんにちは。
そして初めまして。
今回続編となる幻想入りを入れた小説です。
ではどうぞ。

## 第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り

〇〇学園2年A組の教室にて

～優視点～

あの日から1週間が経った。学園は平穏な日々が続いた。だけど、またつまらない…いや、そんな事は良い。俺は今が一番良いと思う。

生徒「起立、礼、さよなら～！」

優「なあ、茜、アントニオン、たまには一緒に帰ろうぜ。」

ちなみに俺は

瀧沢　優　（たきざわ　ゆう）
年齢：１４歳
身長：１６８ｃｍ

茜「いいけど、どうしたの？急に。」

後、こいつは

大島　茜　（おおしま　あかね）
年齢：１４歳
身長：１６０ｃｍ

優「気分だよ、気分。」

ア「たまには一緒に帰るのも良いですよネ。」

で、こいつは

アントニオン・ライブラリー
年齢：１４歳
身長：１８０ｃｍ

今俺達は帰り道を歩いている。

優「俺、こっちだから。」

茜「うん、じゃあね。」

ア「また明日でス。」

俺達はそれぞれの帰り道に別れた。

トコ　トコ　トコ

何か変な感じがする。誰かに見られている。

優「・・・」

後ろを振り向くが誰も居ない、と
突然俺の前に気配がする。
俺は前を向く。

優「？」

？「あら？ばれちゃった。」

俺の目の前には　何処の国の格好なのかわからない服を着た金髪の日傘をさした女性がいた。
その女性は宙に浮いているが、よく見てみると、何か変な物の中に入っている。

優「あんたは誰だ？」

？「ウフフ…私の名前は八雲　紫よ　（やくも　ゆかり）　。」

優「その変な物は何だよ。」

紫「これは私のスキマよ。」

優「スキマ？」

紫「私はスキマ妖怪、八雲　紫」

優「何が目的だ？」

紫「あなたを私たちの世界に招待する事。」

紫とか言う妖怪？はそう言うと、ニヤリと笑う。
瞬間…俺の視界は気色悪い目玉に囲まれた。
意識がどんどん…遠ざか…る…

〜outside〜

スー

ドサ！

優「…く…そ…」

優は気がついた、が、全く知らない場所にいた。
よく見渡すと茜とアントニオンがいる。

優「あいつらも…」

優は茜とアントニオンに近づき、声をかけた。

優「おい！大丈夫か？」

茜「…優？」

ア「優さン？」

茜「優？どうしてここに？て言うかここどこ？」

優「わかりゃ、苦労はしねぇよ…」

ア「優さン、茜さン、現在地が僕の脳内地図に載ってませン、恐らく、異世界かト…」

サーー

？「誰？」

優達は声の方向を向くとそこには紅と白の和服を着た少女が障子を開けながら出て来た。

優「俺達、別に怪しい者じゃ…」

？「…でしょうね…まあ、一応歓迎しとこうかしら？」

茜「それより、ここが何処なのか教えて。」

？「わかった、まずは自己紹介。私は博麗　霊夢　（はくれい

れいむ）　よ。」

霊夢がそう言うと、優達も立ち上がり、自己紹介をした。

優「俺の名前は瀧沢　優だ。」

茜「私は大島　茜。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

霊「それじゃあ、教えるわ…ここは幻想郷、あなた達の世界には存在しない妖怪や天狗などが居るわ。」

優「妖怪？童話でしか聞いた事が無いぞ？」

霊「ここは常識とは逆の幻想の世界。だからここの世界の人物は、大抵は能力を持っているわ。」

優「能力？」

霊「あなた達にも能力があるか調べても良いけど…どうする？」

優「俺は大丈夫だ。」

茜「私も良いよ。」

ア「僕も、問題無いでス。」

霊「じゃあ…「霊～夢～！！」何よもう…」

声の方向を向くと、かなりのスピードで飛んでくる黒と白のドレスの少女の姿が…

？「よっと！ん？霊夢、こいつら一体何者だ？」

霊「外来人よ、しかも三人。」

？「へ～、私は魔理沙、霧雨　魔理沙　（きりさめ　まりさ）
って言うんだ。よろしくだぜ！」

優「ああ、よろしくな、魔理沙。俺は瀧沢　優だ。」

茜「大島　茜だよ。」

ア「アントニオン・ライブラリーでス。」

霊「じゃあ…裏に行きましょう。」

魔「私もついてくぜ！」

優達は霊夢の後ついていった。

霊「ここで良いわ。じゃあ始めるわよ。」

優「ああ…」

茜「・・・」

ア「・・・」

霊夢は目を閉じた。すると…

霊「わかった。」

優「早いな…」

霊「まずは優。あなたは
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）よ。」

優「何だそれ？」

霊「毒、病、能力による効果や力を全て無くす能力よ。ちなみに刃物も効かないわ。」

優「程度の問題じゃあねぇよ…」

霊「後一つはかなり特殊な能力よ。」

優「何の能力だ？」

霊「　（全ての技を自分の物にする程度の能力）
これは相手の技や能力を見ただけで自分の物にできる能力よ。」

優「は～…」

霊「ちなみにこの世界の遊びで弾幕ごっこ　てのがあるわ。技とな

るスペルカードを使って相手を倒す。そのスペルカードの技を全て避けるか、スペルカードを使って反撃するかで良いわ。持っているスペルカード全てを使い切ったり、倒されたりしたら負け。」

優「なんとなくわかった。」

魔「じゃあ私と弾幕ごっこしようぜ！」

優「は？」

魔理沙はそう言うと中に浮いた。

優「待てよ俺は飛べな…「だＺＥ！」うわあああああ？」

いきなり弾幕を飛ばしてきた魔理沙。

優は少しイラッときた。

優「飛んでやろうじゃねぇか…」

優は気を身体全体から発し、飛ぶイメージを浮かべる。すると…

フワッ

優「よし！やった？」

魔「…早…」

霊「じゃあ次は茜。あなたは

（四聖獣を操る程度の能力）よ。」

茜「四聖獣を？」

霊「あなたは今までも操ってた見たいね。主に、会話できたり、憑依させたりだけど、実体化　できる事が一番の利点ね。」

茜「て事は、一緒に闘えるって事？」

霊「そう。で最後に、アントニオン？だっけ？あなたは（物体を誘導する程度の能力）　よ。」

ア「物体を…ですカ？」

霊「自分以外、弾幕以外の何でも思い通りにできるわ。さぁ、これで終わり。」

ドギャーン！

魔「キャッ！」

優「勝負あったな。」

霊夢の説明が終わると同時に、優と魔理沙の弾幕ごっこも終了した。

魔「次は負けないからな！」

優「何言ってんだ？お前は勝てねぇよ。」

魔「へ？」

優「俺はあれで一番弱い力だから。」

魔「ええ？本気じゃ無かったの…てっきり、マジなのかと…」

優「しかし、あれだ。何だか俺の力がさらに上がった感じが…」

茜「確かに、幻想郷に来てから何か、力が湧いてきた。」

ア「僕もでス。」

霊「で、どうするの？もう日が暮れるわよ。」

優「じゃあ、俺達は宿を捜そうぜ。」

茜「うん。」

ア「はイ。」

霊「人里はここから森を抜けたとこにあるわ。」

優「ありがとう。そう言えば、ここ何て言うとこ何だ？」

霊「ここは博麗神社、私はこの神社の巫女。後、お賽銭箱はここだ

から。」

優「今度来たら入れとくよ。」

優、茜、アントニオンは、今晩の宿を探しに森の中に入って行った。

魔「私も帰るぜ。」

魔理沙は箒にまたがり、飛んで行った。

霊「居るんでしょ、紫。」

紫「ウフフ…」

霊「あんたまた連れて来たわね？」

紫「良いじゃない、これから面白くなるんだから。」

霊「彼等の事も考えずに何故？」

紫「ウフフ…」

スーー

霊「あっ！紫！まちな……ふぅ…何だか嫌な予感がする…」

〜続く〜

## 第1話　超絶で最狂の三人が幻想入り（後書き）

次回は紅魔郷編からです。
優たちが異変解決。
以上です、ではまた次回。

## 第2話　紅い霧の異変　その1（前書き）

今回は紅魔郷編の前半です。
常識破りの優達が異変解決です。
霊夢が解決しないのは見逃してください。
以上です。
ではどうぞ。

## 第2話　紅い霧の異変　その1

人里にて

優「ふぅ、人が居るって落ち着くな。」

茜「うんうん、落ち着く　落ち着く。」

ア「これで帰る事が出来たら良いのですガ…」

優「…まあ、そうだけど…折角来たんだ、少し楽しもうぜ！」

茜「そうだよ！アントニー！」

ア「…ハイ」

俺達は人里で一晩過ごす事にした。

～翌日～

人里は謎の紅い霧に覆われていた。

優「何だ？この霧は…」

茜「何か寒い。」

ア「霧に覆われたため、太陽の光が当たらなくなってまス。」

優「原因は何だ？」

茜「捜しに行く？犯人を。」

優「よし！行くか！」

と言うわけで、俺らは謎の霧の原因を探りに行く事にした。

～森の中～

優「視界が悪いな。」

茜「見えなくなるより良いよ。」

その時、後ろに気配を感じた。

優「誰だよ？用があんなら俺らの前に来いよ。」

？「ねぇ？あなたは…食べても良い人間？」

その言葉と同時に、１３０ｃｍ位の小さい少女が浮きながら近づいて来た。

茜「妖怪？」

優「お前は何て名前だ？」

？「私はルーミアって言うの。ねぇ、あなた達は食べても良い人間？」

優「少なくとも良い訳無いんだが…」

ル「でもお腹がペコペコだから食べる。」

優「ありゃ…」

ル「いただきま～す！」

ルーミアはそう言うと大口を開けて飛んでくる。

茜「危ない！」

「次元斬！」

茜は次元斬でルーミアを避けようとする。

スパッ

だが、切れたのはルーミアの頭に着いてたリボンだった。だが…

ル「・・・」

茜「あれ？当たっちゃったかな…」

ルーミアは宙に浮いたまま飛ぶのをやめる。すると…

ル「ウフフフ…アハハハ…」

優・茜・ア「？」

ル「封印を解いてくれてありがとう。改めてあなた達を食べさせてもらうわ。」

優「そう簡単に食われれ…うっ？」

～outside～

優は突然苦しみ出した。ルーミアは苦しむ優に向かって飛んだ。

茜「させない！」

ル「無駄よ。」

ルーミアは闇の世界を拡げた。

ル「いただきま～す。」

ルーミアが優に飛び付こうとした、その時…

優「！」

グチャッ

酷くエグい音が鳴り響く。

ル「？」

ルーミアは思いっ切り飛んでいき、木を何本か折って止まった。
優はルーミアに近づく。あの時、ルーミアを吹っ飛ばしたのは優だった。

優「・・・」

優はルーミアに近づく、金色の眼を光らせながら…

ル「…い…いや…」

ルーミアは凄まじい恐怖を感じた。

優「大丈夫か？」

優はそう言う。ルーミアの鼻は潰れていた。あの瞬間に優は拳をルーミアの顔面に当てたからだ。

ル「あ…あぁ…」

ルーミアは途轍もない痛みで、声を出すのがやっとの状態だった。
優は手をルーミアに向け、優しい緑色の波動を放つ。すると…

ル「？」

ルーミアの鼻はたちまち治り、傷も全て治った。

優「恵みの波動」
「お前みたいな重傷を負った奴の為にとって置いたんだ。」

ル「何で？私は妖怪よ？傷が治ったらあなた達をまた襲うかもしれないのよ？」

優「みんな生きているんだ。どんなに恐い奴でも、殺して良い事は無いんだよ。」

優は金色の眼を黒目に戻し、茜とアントニオンのとこに戻る。

優「今度は相手をちゃんと見てからやれ！」

茜「優…今の…」

優「力の覚醒って奴かな？これの名前を（超化）　にする。」

ア「いきなり名前ですカ。」

優「こう言うのは早い段階で名前を決めておいたほうが良いんだよ。
そんな事より、早く行こうぜ。」

優達はまた歩き出した。

優「つか、急に寒くなって来たな。」

茜「ハックチュン！」

ア「ここだけ妙に温度が低いでス。」

と、そこに…

？「来たわね…くらえ！」

優「ん？」

カキーーン

優「わ？」

茜「えっ？」

ア「ワオ？」

優達は突然飛んで来た物体をかわした。

ア「氷が、氷が飛んで来ましタ！」

飛んで来た物体は、何とかなり大きい氷だった。

？「あたいったら天才ね？」

優達は声の方向を見てみると、背中に羽のようなものがある幼い少女が木の上に居た。

優「おい？何だよいきなり！」

？「あたいの縄張りに入ったからよ！」

茜「て言うか、自分で天才って言ったらお終いだし。ねぇ、あなた名前は？」

？「あたいはチルノ！氷の妖精よ！」

チルノは胸を張りながら堂々と言った。

ア「あの、どうしたら見逃してくれますカ？」

チ「最強のあたいと勝負よ！」

ア「わかりましタ。」

優「アントニー！気をつけろよ！」

アントニオンはチルノのとこへ行く。

ア「いつでも良いですヨ。」

チ「じゃあ、あたいから！」
「氷符　アイシクルフォール！」

チルノはスペルカードを発動。
大量の氷が放たれる。が…

ア「・・・」

チ「あれ？何で？」

チルノの放った氷は全てあらぬ方向に飛んで行った。

チ「ま、まだよ！」
「凍符　パーフェクトフリーズ？」

チルノは大量の氷の弾幕を全体に放つ。

ア「オット！」

アントニオンは大量の氷の弾幕を上手くかわす。すると…

カチーン

氷の弾幕は動きを止めた。

ア「止まっただけですか？」

チ「くらえ！」

チルノはさらに弾幕を放つ。だが…

ア「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンもスペルカードを発動。
放たれる小型ミサイルは弾幕を全て相殺した。

チ「何今の？」

ア「僕の勝ちでス。」
「眼撃　アイレーザー！」

アントニオンはチルノ目掛けレーザーを撃った。

チュドーン！

チ「？～」

チルノは勢い良く飛んで行った。

ア「…少し、やり過ぎましタ。」

優「…まあ、良しとする。」

茜「ねぇ、あれ…」

茜は指を指す。優とアントニオンは指の指した方向を見てみると、そこには…

優「何だ？あのお城は？」

茜「あそこが霧の原因だよ。」

ア「霧の濃度が高いでス。原因で間違いありませン。」

紅い霧を出していたのは、紅い屋敷だった。
いかにも何か出そうな巨大な屋敷に…

優「じゃあ、行きますか…」

〜続く〜

## 第2話　紅い霧の異変　その1（後書き）

次回は中編です。
ちなみに優の力は覚醒しきってません。
幻想郷に来てから強くなっているのわ確かですが、まだ全力は一切出してません。
後、優の力の基準は

最弱　弱い妖怪を一撃

ちょっと　中級妖怪を一撃

少し　鬼を倒せる

本気　誰にも負けない

今はこれくらいです。
ではまた次回。

## 第3話　紅い霧の異変　その2（前書き）

ようやく紅魔館に到着。
闘いはかなり凄い事に…
と、いくかは分かりませんが、楽しんで行って下さい。
それではどうぞ。

## 第3話　紅い霧の異変　その2

謎の紅い館にて

優「デカいな…」

茜「何か近くで見ると、さらに大きく見えるね…」

ア「…ノーコメント。」

？「誰ですか？」

館に驚いていると、誰かの声が…

？「人間が一体何の用ですか？」

優「いや…この霧のもとを探しに来たんですけど…あんたここの門番だろ。」

？「えぇ、そうですが、何か？」

優「そこを通してくれないか？」

？「いやだと言ったら…」

優「力づくで通るだけだ。」

？「私に勝てるとでも？」

優「少なくとも、めんどくせぇ拳法より俺は強い。」

？「な？」

優は挑発する感じに喋った。

優「俺の名前は瀧沢　優、あんたは？」

？「私の名前は紅　美鈴　（ほん　めいりん）　。」

優「おお、着ている服と一緒でチャイニーズだな。」

紅「さぁ…行きますよ？」

ダダッ

美鈴は先制攻撃を仕掛けようとする。

優「・・・」

サッ

紅「？」

優「足がガラ空きだぞ。」

優は美鈴の足に足払いをした。

紅「し…しまった？」

美鈴は足払いで宙を舞った。
普通はここで追い討ちをかけるが、優は何もしない。

スタ

美鈴は浮いた状態から上手く体制を直し、着地した。

紅「さっきは油断しました。ですがこれならどうですか？」

「彩符　彩光乱舞！」

ババババッ

美鈴の周りから虹色に輝く弾幕が放たれた。

優「よっと。」

優は上に飛んで避ける、が…

紅「掛かりましたね？」
「気符　地龍天龍脚！」

美鈴は飛び上がり気を帯びた蹴りを優に当てる。

ズガッ！！！

優「ぐほっ！」

美鈴の蹴りは優の腹に見事に命中。

紅「終わりです？」
「華符　破山砲！！！」

ブォーン？

美鈴は手から強力な気砲を放つ。
と、その時…

優「それで本気かよ……はあ？」

バーーン？

優は仰向け状態から素早く立て直し、波動を放つ。

バーン？

波動と破山砲がぶつかり、爆発し、爆風が美鈴と優にぶつかる。

紅「うくく…」

優「終わりはお前だ…」
「瞬烈　刹那の百烈拳。」

優はスペルカードを発動。の瞬間…

バシ！

という音がなり、優は美鈴の前から後ろにいた。

紅「な、何を？」

優「自分の体を見てみろ。」

紅「？…」

美鈴は自分の体を見た瞬間、頭の中が真っ白になった。
それは、美鈴の体に深い拳の跡がたくさんあったからだ。その時…

ズガガガガガ！！！

その音と共に美鈴の体は揺れる。
百発の拳が美鈴を攻撃する。

紅「あ…が…」

美鈴は百発の拳を一気に浴びた為、口から血を吐き、意識が飛ぶ。

ドサ

美鈴は地面に落ちた。

優「恵みの波動。」

優は美鈴に近づき、優しい波動を放つ。

紅「う…ん…」

美鈴の傷が治り、意識が戻る。

優「大丈夫か？」

紅「…はい。」

優「じゃあ、ここ、通るからな。」

紅「はい。」

優「行こうぜ、茜、アントニオン。」

優達は門を開け、紅魔館へ入った。

ギーー

バタン

優「中の方が広いなあ…」

茜「外もなかなかだけど…」

ア「一度で二度ビックリでス。」

そんな話をしている時…

ストトン

優「？」

茜「？」

ア「？」

優達の足元にナイフが刺さっていた。

？「あなた達は誰ですか？紅白や黒白とは違うみたいだけど。」

優「俺達は霧の原因を探しに来たんだ。」

？「じゃあ、侵入者は排除しなければいけないわね。」

優「本気で頼むぜ、門番何かすぐ終わっちまったからな。」

？「外来人にしては相当の実力をお持ちね。
私は　十六夜　咲夜　（いざよい　さくや）　よ、
あなたは私に勝てるかしら？」

咲夜と言うメイドはナイフを手に持ち、構える。そして…

シュッ

咲夜はナイフを優に投げる。

優「うわ？」

優はナイフをかわす。が…

咲「じゃあ…」

「奇術　エターナルミーク！」

シュシュシュッ

咲夜は大量のナイフを優に投げる。

優「どっからナイフ出してんだよ？」

優は驚くもナイフを全て避ける。
その時…

シューーン

優「ん？」

優の周りは灰色で茜とアントニオンは動かない。

優「どっかのマンガで見た、時を止める奴か？」

優は疑問を抱いたが、すぐにやめる。なぜなら…

優「よし、これでこの能力は俺の物だ。」

シューーン

優が能力を見終わったと同時に周りの色が戻り、時が動き出した。
よく見ると、床に刺さっていたナイフが無い。咲夜が拾っていたようだ。

咲「なかなかやるわね、でもこれならどうかしら？」
「幻符　殺人ドール！」

咲夜の後ろにナイフが集まる。そして…

ババババッ

ナイフが一気に優に向かう。

優「危ねぇ！」

優はかろうじて避ける。

優「俺は避けるだけは嫌いでな。」

バッ

優は波動拳を放つ。

咲「こんなもの…」

咲夜が波動拳を避けた、その時…

優「これはかわせるか！」

「波動　波動百烈拳！」

ババババッ

優は百発の波動拳を放つ。

咲「無駄。」

シューーン

再び時が止まる。が…

優「これでも無駄って言えるか？」

咲「な、なぜ？なぜ動ける？」

優「俺の能力は
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）　だ。お前の能力の　（時を操る程度の能力）　は効かない。」

咲「くそ…」

優「後一つは
（全ての技を自分の物にする程度の能力）
お前の能力や技はいただいた。」

咲「？」

優「自分の能力を受けてみろ！」
「白世　クイックシルバー！」

バシューーン

世界はカメラで言う　ネガ　や　ポジ　の世界に変わった。咲夜は動かなくなった。

優「アタタタタタ？」

ドガガガガ！

咲夜に容赦無くケン○ロウ並みの百烈拳を叩き込む。そして…

優「そして時は動き出す…」

バシューーン

咲「グハッ？」

咲夜は吹っ飛んで壁に背中をぶつける。

優「やれやれだぜ。」
「恵みの波動。」

優は倒れている咲夜に優しい波動を放つ。

咲「なぜ私を治したの？」

優「お前、俺が殺すと思っているのか？
俺達は原因を探しに来た、それだけだ。」

優は咲夜の傷を治し、茜、アントニオンと紅魔館を歩き始めた。

優「いや～幻想郷は強い奴ばかりだな。」

茜「でもみんな楽勝で勝っているじゃん。」

ア「そうですヨ、優さんは最強の外来人でス。」

優「あそう？それよりも、何か扉があるぞ。」

優は怪しい扉を見つけた。

優「行くぞ！」

茜「よし！」

ア「ハイ！」

優達は扉を開ける。と…

優「本？」

茜「図書館か何か？」

ア「とても広いでス。」

図書館に出た優達に…

？「誰なの？」

また女性の声、優達は声の方向を向く。

優「あんたはこの図書館の管理人か？」

？「ええ、そうよ。」

茜「ここの主人を探しているんだけど、知らない？」

？「…私と戦って、勝ったら教えてあげる。」

茜「結局、闘うのね。」

茜は二本の刀を抜き構える。

茜「私は大島　茜、あなたは？」

？「私はパチュリー、パチュリー・ノーレッジよ。」

紫の髪をしたパジャマ着のような少女はかなり大きい本を開く。そして…

パ「水符　プリンセスウンディネ！」

パチュリーは水の弾幕を放つ。

茜「簡単、簡単。」

茜は水の弾幕を楽々と避ける。

パ「やるわね、次はどうかしら？」

「金木符　エレメンタルハーベスター！」

パチュリーは浮かび上がり、周りから回転する刃のバリアを張りながら近づく。

茜「そんな攻撃が通用するとでも？」
「朱　玄　白　青符　　聖獣壁！」

茜は四本の刀　朱雀、玄武、白虎、青龍を融合
、聖獣刀を作りだし、聖獣刀から力を放ち、聖なる壁を作りだした。

ガギン！

刃のバリアと聖なる壁がぶつかる。

パ「なら…」
「月符　　サイレントセレナ！」

茜の足元から青白い光が出始める。

茜「朱　玄　白　青符　　四聖獣の閃き！」

茜は四聖獣の力を受ける。
茜の足元の光はエネルギーとなり、茜に直撃。

パ「ふ、これでトドメよ。」

パチュリーはスペルカードを取り出そうとした、その時…

茜「させない！」
「聖剣　聖獣閃？」

茜は光のなかから飛び出し、オーラを帯びた聖獣刀でパチュリーを斬った。

ドッ？

パ「あぁ！」

パチュリーは床に落ちた。

茜「安心して、峰打ちだから。」

そう言うと、茜は刀をしまう。

優「大丈夫か？」

優はパチュリーに恵みの波動を放つ。

パ「ええ、何とか…」

優「主人のとこへ、案内してくれるか？」

パ「負けたし、良いわよ、別に。」

～しばらく～

パ「ここよ。」

優「サンキュー。」

パ「じゃあ、私は戻るから。」

パチュリーは浮遊しながら戻って行った。

優「ついに来たな。」

茜「ラスボスだね。」

ア「行きましょう、優さン。」

優「よし！開けるぞ！」

～続く～

## 第3話　紅い霧の異変　その2（後書き）

次回はついに後編。
最後の敵とは…
ではまた次回。

## 第４話　紅い霧の異変　その３（前書き）

ついに紅魔郷編ラスト。
優達奮闘。
以上です。
どうぞ。

## 第４話　紅い霧の異変　その３

紅魔館にて

優「開けるぞ！」

ダン！

？「開ける時ぐらいノックをしたら？」

優達の目の前にはかなり幼い少女がいた。

優「あんたがここの主人か？」

？「ええ、そうよ。」

少女は異様な程の妖力を放つ。
だが、優達は妖力に押される事は無い。

？「私はレミリア・スカーレット。二つ名は
（永遠に紅い幼き月）」

優「俺は瀧沢　優。二つ名は
（最強の外来人）てとこかな？」

茜「私は大島　茜。二つ名は
（四聖獣を操る剣士）かな？」

ア「僕はアントニオン・ライブラリー。二つ名は　（最凶の現代兵器）　ですかネ？」

レ「…まあ、いいわ、でも、今日はこんなにも月が紅いから本気で殺るわよ。」

優「いいぜ。本気で来てくれた方が思いっきりできる。」

茜「そうそう、みんな楽勝で勝っちゃったし。」

ア「みなさん、本当に本気だったのですかネ？」

レ「・・・」

今の話で優達の実力がわかった、いや…わかってしまったレミリア。
かなりの力を出さなきゃ殺られてしまう。

レ「ちなみに私は何だかわかる？」

優「何なんだ？」

レ「私は吸血鬼よ。」

優・茜「マジ？」

ア「血が吸われてしまいまス…」

優・茜「お前　（あんた）　は大丈夫？」

そんな会話の中でレミリアは一人とり残されていた。

レ「そろそろ始めましょうか？　（怒）　」

優「ああ…」

そして…

ア「まずは僕からー！」
「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンはミサイルを放つ、が、レミリアは軽くかわす。

茜「なら！」
「幻影　無限幻影剣！」

茜は　無幻　を構え、周りに幻の剣を展開。

幻の剣はレミリアへ一直線。

ササササッ

だが、レミリアは無限に飛んでくる幻剣を全て避ける。

茜「そんな…」

レ「どうしたのかしら？私の思い過ごしだったかしら？」

レミリアは少しガッカリしたが、その考えはすぐに覆される。なぜなら…

優「おい、まだ俺がいるんだ、本気を出せ、じゃないと…死ぬぞお前…」

優は気を身体から放つ。その気はレミリアを圧倒していた。

レ「…わかったわ。」
「天罰　スターオブダビデ！」

レミリアを中心に紅いレーザーが放たれる。
そのレーザーから丸い球ができ、球からまたレーザーが放たれる。

優「うっわ？」

優はレーザーを避けるが…

レ「まだよ。」

レミリアは弾幕を放ち、丸い球からも弾幕が放たれる。

優「そう来るか。」

優は弾幕を全て避ける。

レ「さすがね。なら…」
「運命　ミゼラブルフェイト！」

レミリアはスペルカードを発動。
紅い鎖が優を縛る。

優「な？何だこりゃ？」

レ「その鎖から抜けられるかしら？」
「神槍　スピア・ザ・グングニル？」

レミリアは手にエネルギーを集め、紅く、
長い槍を作りだした。

優「まずい！」

ギギ…

優は身体全体に力を入れ、鎖をひき千切ろうとする。そして…

バキン？

鎖をバラバラに千切った。が…

レ「遅かったわね。」

パーーン？

レミリアは出来上がった紅い槍を優に投げる。

優「まだだ！」

バーーン？

優はかろうじて波動を放つ。
放った波動が紅い槍を相殺する。

優「はぁ…」

レ「驚いたわ…あなたみたいな人間がここまでやれるなんて。」

レミリアは少し驚く。

レ「あなたは私の　（運命を操る程度の能力）が効かないとはね。でも…」

レミリアは近接戦闘の構えをとる。

レ「これならどうかしら？」

ズバッ

レミリアは優に素速く近づき…

ドカッ？

腹に拳を叩き込む。

優「ぐっ？」

レ「どうしたの？」

ボガッ？

優「うぐっ！」

レ「さっきまでの…」

ズガッ？

優「ぐふっ？」

レ「動きは…」

バゴッ？

優「ぶっ？」

レ「まぐれだったのかしら？」

バギッ？

優「うああ？」

優はレミリアの連撃で吹っ飛ぶ。

レ「これでトドメよ。」

レミリアは優の前に来て、トドメの拳を打とうとした。その時…

パッ

レ「？」

レミリアは驚愕した。何故なら…

優「フフ…」

優はレミリアの拳を人差し指一本で止めているからだ。

レ「何で？」

優「最弱じゃあ、足りないか…
まあ、それなりの力を持っているのは妖力を感じた時からだけど…」

レ「な…なにを…」

優「ちょっと力出してやる、今度は退屈させねぇよ。」

優はそう言うと、気を身体全体から放つ。
その気は今までに無い程の勢いと力を出していた。

優「覚悟は出来てるな？」

ドガン？

優はかなりの威力のパンチをレミリアの小さい腹にぶち込む。

レ「グハッ？」

レミリアは吹っ飛び、壁に直撃する。

優「どうした？力は全然出してないぜ？」

レ「バケモノね…」

優「吸血鬼には言われたくないな。」

「波動　波動百烈拳！」

優は百発の波動拳を放つ。

レ「くっ？」

レミリアはかわそうとするが、避け切れず幾つか直撃。

レ「な、何で？」

優「お前の能力を俺が使っているだけだ。」

レ「？」

優「俺の能力は
（全ての技を自分の物にする程度の能力）　だ。
お前の能力や技は全部もらった！」

レ「何ですって？」

優「今度は本気で殴る。ちょっとでも痛いぜ。」

優はそう言うと、握り拳をつくる。
すると…

レ「紅魔　スカーレットデビル！」

レミリアはスペルカードを発動。
紅いエネルギー波はレミリアを取り巻き、
バリアとなる。

優「うおおらあああ？」

優は思いっきり突っ込み、拳を繰り出す。

バァーーン

優の拳がバリアとぶつかり合う。

レ「無駄よ、このバリアは運命でも破れない。」

優「誰も能力を使うとは言ってないぞ。」

レ「え？」

バリバリ…

バリアは崩れ始め、そして…

バァーーン！！！

バリアは崩れ、レミリアも床に崩れる。

優「・・・」

レ「わかったわ…霧は後で…「今すぐやれ！！！！」はい…」

ドゴーーン！！！

優「何だ！」

〜続く〜

## 第４話　紅い霧の異変　その３（後書き）

実は後編の後編があります。
狂気の…
それではまた次回。

## 第5話　紅い霧の異変　ＥＸＴＲＡ（前書き）

後編の後編、ＥＸＴＲＡです。
真の敵は…
・・・
どうぞ。

# 第5話　紅い霧の異変　EXTRA

紅魔館にて

優「あの音は何だ？レミリア！」

レ「・・・」

優「おい！レミリア！」

レ「優！力を貸して！」

優「何があったんだ？」

レ「私の妹が…暴れ始めたの。」

優「妹？…よくわかんねぇけど、助けてやる！」

茜「私も行く！」

ア「僕モ！」

優「お前らはここで待ってろ？」

優は茜達を怒号で止める。

茜「何で？」

優「俺はお前達を巻き込みたくない…俺は親友を死なせたくない。」
（あの日からずっとそうだった…）

茜「…優？」

優「お前達は待っててくれ、俺はまだ死ぬ気は無い。」

茜「わかった。」

ア「生きていてくださいネ…」

優「ああ、んじゃ、行こう！」

レ「ええ。」

優とレミリアは部屋を出て行った。
そして、階段を下に降りて行き、地下牢に到着した。

優「すげぇヒビだ…今にも壊れそうだな。」

レ「この扉を開けたら死ぬと思った方がいいわ…あの娘は私より強いから…」

ドーーーン？」

ピキッ

優「大丈夫…俺はまだ死ねないから…」

レ「そう…なら気をつけて…」

優「ああ。」

優はそう言うと、ヒビの入った扉を蹴り崩す。

ドゴーーン！

？「アハハ…開いた。」

優「よう。」

？「あなただ～れ？」

優「俺は瀧沢　優って言うんだ。お前は？」

？「私はフランドール、フランドール・スカーレットって言うの…」

優「じゃあフラン、俺と弾幕ごっこするか？」

フ「うん！する！」

優「ただし、条件がある。」

フ「な～に？」

優「弾幕ごっこと言っても、お遊び抜きの本気の闘いをしよう、それが条件だ。」

フ「フフ♪いいよ♪」

フランは狂った笑顔で答える。

フ「あまり早く壊れないでね。」

優「心配御無用、お前の能力は効かない。」

優は手を動かす。

優「来い…」

フ「アハハ♪」

ダッ

フランは優に突っ込んで行く。

優「うぉ？」

フ「ハハ♪」

ヒュン！

バシ！

優「危ねっ！」

優はフランのパンチを手で受け止める。

フ「フフ…お兄さん強いね♪でも…」
「禁忌　クランベリートラップ！」

フランはスペルカードを発動。
色々な場所に呪式を配置。
呪式から弾幕が放たれる。

パパパパパン？

優「飛ぶか…」

優は飛び上がり、浮遊する。

優「よっと！」

優は弾幕を上手く避ける。

フ「避けてばかりいないで少しは攻撃してよ～。」
「禁忌　フォーオブアカインド！」

フランは突然４人に増える。

優「トラウマになりそうだ…」

フラン　１２３４「行くよ！」

４人のフランはそれぞれ分かれ、攻撃をする。

優「全く…」

優は１人目をかわす。
２人目もかわす。
３人目もかわすが…

フ「こっちだよ！」

ブン！

優「くそ！」

シュッ

4人目はギリギリでかわした。

フ「次はどうかな？」

「禁忌　恋の迷路！」

フランは円を描くように弾幕を放つ。

優「く…キツイな…」

優は迷路と言うのを理解し、上手くかわすが、さすがに辛くなってきた。

ドバン！

優「ぐはっ？あっ！しまっ？ぐあ～～！！！」

ドババババン！

優に一発の弾幕が直撃すると続けて弾幕が直撃。優は弾幕にまみれる形になる。

フ「アハハ♪まだまだ♪」
「禁忌　レーヴァテイン！」

フランは炎のオーラを帯びた剣を振るう。

ズバン？

優「ぐあっ…！」

優は避けられず、斬撃をまともにくらう。

バシュ！

優「く…ああ…がは…！」

優の身体に大きな深い切り傷を負う。
切り傷から血が流れる。

フ「どうしたの？まだ終わらないよ♪」
「禁弾　スターボウブレイク！」

フランはボウガンを作りだし、優に向けて撃つ。

ボン？

優「は…！」

ビシュ？

放たれたボウは優に突き刺さり、壁にぶつかる。

後からやって来た茜とアントニオンは目を疑った。

茜「…優？」

ア「…優…さン？」

フ「あ〜、壊れちゃった…つまんない。」

レ「…まさか…こんな事になるなんて…」

不安になったレミリアが現れた。

フ「他のお兄さんにお姉様まで、私と遊んでくれるの？嬉しい♪」

レ「く…」

優「おい…勝ってに殺すなよ…」

カラン

優はゆっくりそう言う。
そう言った後、優の身体に突き刺さっていたボウが落ちる。優は壁にはまっていただけだった。

茜「優？」

ア「優さン？」

レ「あなた…なぜ？」

優「言ったろ、俺はまだ死ねないって。」

フ「お兄さん生きてたんだ～♪」

スタッ

優「ああ、さすがに最弱じゃあ足りなかったか～。んじゃ…」

ズギャーーーン！！！

優は一気に気を解放する。

優「ちょっと出して行くか。」

フ「？」

優「さすがに子供に合わせ過ぎたからな～♪
…フフ…フフフ…フハハハ…」

レ「…え？」

優「おっと、ちょっとお前の変なのが移っちまった…だけど、こっからが本番だ、ちゃんと本気出して無いと…死ぬぜ、お前。」

ダッ

優はあり得ないスピードでフランに近づくと…

ズガーーン！！！

フ「グッ…？」

優の放った拳がフランの顔面に直撃する。
その瞬間にフランは吹っ飛び、壁に激突する。

フ「ウグッ…」

優「さっきまでの威勢はどうした？ハハ…」

フ「ク…さすがだね…」

「禁忌　カゴメカゴメ！」

優を囲むように弾幕が展開。が…

優「ただの弾幕だな。」

優は普通の弾幕と言い、簡単にかわす。

優「少し攻めるぜ。」

ズガッ！！

フ「ァグ…！」

フランは痛みのあまり声が詰まる。

優「もっと来いよ。」

フ「ク…」
「秘弾　そして誰もいなくなるか？」

フランの姿が消え、追尾する弾幕が現れる。

優「それがどうしたよ？」

優はあらぬ方向に波動を放つ。すると…

フ「グッ…アア…？」

波動を放った場所からフランが現れた。

フ「なぜ…わかったの？」

優「隠れても無駄だ…遊びじゃないんだ。」

フ「…わかった…これで最後にするよ。」
「ＱＥＤ　４９５年の波紋？」

フランは弾幕を放つ。
その弾幕はまるで波紋のように広がり、跳ね返る。

優「さすが悪魔の妹、フランドール・スカーレット。だけどな…」

優は波紋の弾幕をあっという間に避ける。
そして…

バッ

優は右手をフランに向け…

優「お前は狂気に頼り過ぎた。」

シュン

バァーーン？

優はフランの目の前に瞬間移動し、波動を真ん前で放つ。

フ「ウアアアアッ？」

フランは身体の外部と内部を同時に壊されるような痛みを感じ、悲鳴をあげる。

ドサッ

フランは倒れた。

優はフランに近づき、恵みの波動を放つ。

フ「…うぅ…」

優「悪りぃな、これでも手加減した方なんだ。」

フ「お兄さん、傷…」

フランは優の胸の傷を指差して心配する。

優「おぉ、忘れるところだった。」
「恵みの波動。」

優の傷はたちまち治り、傷跡も残らなかった。

レ「全く…心配掛けさせて…」

茜「やっぱり優は強いね♪」

ア「さすが　（最強の外来人）　ですネ！」

優「レミリア、今度からは気をつけろよ！次はどうなるか…わかる

な？」

レ「わからにゃ～い…「ガキっぽいのは嫌いなんだよ！うぜぇ？」
う～☆」

咲「お、お嬢様！どうしましたか？」

気づくといつの間にか咲夜がレミリアの前に居た。
鼻からヤバイモノが流れている。

優「咲夜？鼻からヤバイモノが…」

咲「優さん…これは…私のお嬢様に対する…
忠誠心です？」

優「何が忠誠心だ！タダの変態じゃねえか？」

茜「引くわ…」

ア「・・・」

咲「う～☆」

レ「そんな事より、あなた達、今日は泊まって行きなさい。」

優「良いのか？」

レ「せめてものお詫びよ。」

優・茜・ア「じゃあ…お言葉に甘えさしていただきま～す！」

こうして俺ら、は紅魔館で疲れた身体を休める事にした。

〜続く〜

## 第5話　紅い霧の異変　ＥＸＴＲＡ（後書き）

次回は三人を紹介します。
まだ知らない方々が多いと思うので。
では、また次回。

## キャラ紹介　超絶で最狂の三人（前書き）

優「さあて、幻想郷に来てからの俺達を今回は作者も含めて紹介するぞ！」

作者「まあ、僕は一応ですから、楽しんでくれると嬉しいです。」

## キャラ紹介　超絶で最狂の三人

瀧沢　優　○○学園　中等部　２年Ａ組
年齢：１４歳
性別：男
身長：１６８ｃｍ

能力
（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）
（見た技全てを自分の物にする程度の能力）

通常攻撃技
波動
波動拳

スペルカード
波動「波動百烈拳」
飛龍「翔龍波」
瞬烈「刹那の百烈拳」

龍撃「滅龍拳」
「究極かめはめ破」
５個

身体能力が常人の１０倍。
幻想郷に来てからさらに倍加。
力が覚醒し、（超化）と言う力が使える。
刃物が効かない。

大島　茜　優と同じクラス
年齢：１４歳
性別：女
身長：１６０ｃｍ

能力
（四聖獣を操る程度の能力）

通常攻撃技
二天一流の極み
次元斬
疾走居合斬り

スペルカード
舞斬「朱雀炎舞」
舞斬「玄武水舞」
風雷「風神の竜巻・雷神の雷鎚」
風雷「風切の壁・稲妻の罠」
朱　玄　白　青符「四聖獣の閃き」
朱　玄　白　青符「聖獣壁」
聖剣「聖獣閃」
幻影「無限幻影剣」
幻世「幻影の世」
龍虎二刀流「龍虎二天閃」
龍虎二刀流「龍の爪・虎の牙」
１１個

龍虎二刀流の伝承者であり、普通の中学生。
刀は全部で

名刀　（朱雀）＼
（玄武）ーーー　聖獣刀
（白虎）ーーー／
（青龍）ーー／

妖刀　（無幻）

風雷　（双剣・風丸）　（双剣・雷電）

アントニオン・ライブラリー　優と同じクラス
年齢：１４歳
性別：男
身長：１８０ｃｍ

能力
（物体を誘導する程度の能力）

通常攻撃技
無い

スペルカード
爆撃「ミサイルボンバー」

眼撃「アイレーザー」

爆閃「マインド・クラッシュ」

実はサイボーグであり、その真実は優達だけが知っている。
誰よりも気遣いで、誰よりも抜けている。

おまけ

作者
年齢：秘密
性別：男に決まっているだろ！
身長：知ってどうする？

能力
（創造する程度の能力）

通常攻撃技
昇龍拳〜！なんちゃって…

スペルカード
スペルカード？何それおいしいの？

空想の人物を創り出せる。
創った物、創られた物を例外無く消せる。

作者「こんな具合です、ではまた次回。」

## キャラ紹介　超絶で最狂の三人（後書き）

次回は優の過去の話。
以上です。

## 第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。（前書き）

優の過去とは…
それは優の力と関係が…
ではどうぞ。

# 第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。

～優視点オール～

今から1年以上前の事…

優が○○学園の中等部　1年A組だった頃。

優「なあ悟志、一緒に帰ろうぜ！」

悟「うん！」

俺の親友の　海導　　悟志　（かいどう　　さとし）
小学４年の頃から友達になった。
こいつはとっても良いやつで、でも気が弱いんだ。だからいつもいじめっ子にいじめられる。

いじめっ子「お～い悟志、今日も決まってんな～。」

悟「や、やめてよ…」

優「おい！嫌がってんだろ！やめてやれよ？」

いじめっ子「何だよ、俺はこいつと遊んでいるだけだぜ？」

優「髪を引っ張るのが遊ぶ事なのか？」

いじめっ子「文句あんのか？」

優「大有りだな！」

いじめっ子「んだと～？」

いじめっ子は俺に突っ込んで来たけど…

優「オラ？」

ドカッ！

いじめっ子「うっ…痛ぇ…くそ！覚えてろよ！」

優「わかった、お前の痛がるとこ、しっかり覚えててやるよ！」

いじめっ子「くそ〜！」

優「悟志だっけ？大丈夫か？」

悟「あ…ありがとう！」

優「なあ悟志、俺と友達になろうぜ。」

悟「え？いいの？」

優「ああ！俺もクラス換えで友達がいないからさ、俺の名前は瀧沢優、よろしく！」

悟「うん、よろしく。」

それが俺と悟志の出会いだ。
それから、俺と悟志はよく遊ぶようになった。
俺は勉強が苦手だけど、悟志はとても頭が良い。だから勉強を教えてもらった。悟志はケンカが出来ないけど、俺はケンカが強かった。だから俺は悟志を助けた。それぞれがそれぞれの弱点を補い、小学

校を楽しく過ごした。
そして小学校を卒業し、〇〇学園に入学した。
俺と悟志は一緒のクラスにだった時、とても嬉しかった。

優「悟志！一緒のクラスだな！」

悟「そうだね！」

でもいじめは無くならない。
学園に来てからもいじめっ子はいる。
俺は勿論悟志を守り続けた。
だけど悟志はどんどん傷付いてゆく。
俺は何があったのか聴くが、悟志は黙る一方。
悟志はついに不登校になった。

優「悟志…一体、何があったんだよ…」

俺は誰がやったのか突き止める事にした。
そしてわかったのは…

斎藤　源　（さいとう　はじめ）

山田　淳也　（やまだ　しゅんや）

橋本　隆司　（はしもと　りゅうじ）

腹わたが煮えくりかえるが、俺がやるより先生に対処してもらう事にした。
先生に頼んだ結果、三人はいじめた事を認めた。
俺はその事を悟志に伝えようと家に行った。
たくさんの食べ物や花を買い、悟志に会いに行く。

優「悟志〜！」

俺は悟志の家におじゃまして、悟志の部屋へ向かう。悟志は落ち込んでいる、だから俺が元気にする。
（驚くだろうな、悟志の奴。このお土産の山を見たら！）
俺はそんな事を考えながら、悟志の部屋のドアを開ける。が…

優「悟！…志…」

信じたく無かった。あいつが…悟志が…首を吊っていた何て。
悟志の親は今朝までは話しをしていたと言う。
そんな事よりも…

俺は…とても…悔しかった…
悟志を…助けてやれなかった…
悲しくて…そして…

ムカついた…

自分の無力さに…悟志を守れなかった事に…
自分の全てにムカついた…

果てしない怒りが俺の体から溢れ出す。

怒りが頂天に達した時…

優「ううううあああああ！！！！！！！」

怒りと共に悲しみも溢れ、涙が流れる。

ズギャーーーーーン！！！！！！！

この瞬間に俺の身体能力が異常かつ、気や波動が使えるようになった。
そして俺は誓った。

俺はたとえどうなろうと、友達は絶対に守る、と…

優「はっ？」

「夢か…たく…思い出したく無ぇのに…」

夢…そう言えば…この頃夢なんて観てないな。

優「まだ夜中の2時か…」

時計を見たらその時間だった。
（そう言えば、ここは紅魔館だったな。あいつらは寝てるだろうし、目も覚めちゃったし、出てる月でも拝むか…）

俺は部屋を出たが…

ガチャ

優「暗いな…灯りも無いし、作るか。」

俺は波動拳を出さずに手に止めるようにする。

バォン！

波動が俺の手で溢れ出し、青い光と気を放つ。明るさは懐中電灯よりも明るい。

優「よし…」

俺は歩く、目的は無い。

咲「あら、あなたも眠れないのかしら？」

ふと、咲夜が目の前に現れた。

優「咲夜か…何だ、見回りか？」

咲「そんなところね…」

優「大変なんだな、咲夜。」

咲「そう言えばさっき、あなたのお友達が眠れないからって、屋上に行ったわ。」

優「屋上？」

咲「ここの階段を上って行けば屋上があるわ、そこに友達もいるから。」

優「ありがとう。」

咲夜は歩いていき、消えるように居なくなった。

タ、タ、タ…

階段を上って行く。
すると、扉が見えた。

ガ…チャ

優「…茜…アントニオン。」

俺は屋根に座って夜空を観ていた茜とアントニオンを見つけた。

茜「優…起きてたんだ…」

優「少し眠れなくてな…」

茜「私たちもなんだよね…」

ア「何ででしょう…サイボーグの僕も眠れないなんテ…」

俺と茜とアントニオンは夜空を見上げていた。

優「なあ、茜、アントニー…お前らは帰りたいか？俺は帰れたら帰りたい…でもここにも居たい。お前らはどうだ？」

茜「そりゃ、私だって帰りたい…でもここにも居たい…それは一緒だよ。」

ア「僕も同じでス。ここでいろんな人と出会って、闘ってばかりですが、心が繋がった気がするんでス。」

優「…そうだな…よし、俺はここに…幻想郷にいることにする。まだこの世界は見たことないものがあるだろうし。」

茜「そうだね…私も幻想郷を冒険したいし。」

ア「まあ、帰ると言っても方法がわかりませんから初めから無理何ですけド…」

優「あっ…そうだった…あはははは。」

茜「あっはははは。」

～夜が明けて～

優「ありがとな、泊めてくれて。」

レ「いいのよ、あなたにはフランを止めてもらったし、また来てもいいわよ。」

優「これたらな。」

茜「今度来る時までに強くなっておいてよね。」

パ「無理言わないでちょうだい。」

ア「でもみなさん十分強いですヨ。」

咲「言われても嬉しくないわ…」

優「じゃあ、またな。」

レ「またね。」

～続く～

## 第6話　優、思い出したく無い過去　そして紅魔館。（後書き）

次回は博麗神社へ…
ではまた次回。

## 第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？（前書き）

優達は再び博麗神社へ…
そこで信じられない事実が…
ではどうぞ。

## 第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？

優「さあて、博麗神社へちょっと行くか。」

茜「博麗神社？何で？」

優「幻想郷に居るって決めたけど、やっぱり帰れるのかどうか知りたいからな。」

ア「でも、ここからだと距離がかなりありますガ…」

優「俺の能力、知っているよな？」

茜「　（自分に害なる物全てを　無　にする程度の能力）　と…あっ？」

ア「　（見た技全てを自分の物にする程度の能力）　ですネ！」

優「そう！俺は瞬間移動を覚えた。」

茜「でも、見てないのに何で？」

優「頭の中に残っている記憶から探し出して、見て覚える事もできるんだ。俺はアニメのド〇ゴン〇ールの悟〇の瞬間移動を覚えたんだ。」

茜「なるほ。んじゃ、早く行こう！」

優「よっしゃ！じゃ掴まれ！」

シューン！

シュバー！

優「到着！」

茜「凄い！本当に一瞬だ！」

ア「優さン！すごくカッコいいでス？」

霊「・・・」

ふと神社を見ると、視線に入る口が開いたままの紅白の巫女。

優「よう、霊夢！」

霊「常識破りね…」

優「幻想の住人に言われたかないな。」

俺はそう言いながら指で５００円を弾き、お賽銭箱に…

チャリン¥

霊「あっ！」

優「それと、聞きたい事があるんだけど…」

霊「お賽銭をくれたし、いいわよ、何でも言ってみなさい。」

優「俺達は元の世界に帰れるのか？」

霊「無理よ。」

優「無理？」

茜「何でよ？」

霊「あなた達は能力を持っている上に力も並じゃないわ、あなた達の存在は常識から幻想に変わったのよ。」

優「何でそれを言わない？」

霊「言ったら、あなた達からの文句が絶えないでしょうからね。それに、無理にでも帰そうものなら、結界が崩れてしまうわ。」

優「そうか…なら大丈夫だ。俺達はここに居ることにした。」

霊「え？」

優「ここで暮らすのも悪くないと思ってな…それに幻想郷はよく異変が起こるんだろ？異変の解決は霊夢もするんだろ？俺らがそれを手伝うってのも良いかと思ってな。」

霊「わかったわ。あなた達の家の提供をしてあげる。紫、いるんでしょ？」

スーー

紫「わかってるわよ。」

優「…あの顔、どっかで見たような…」

茜「確かに…見たことある…」

ア「あれは確カ…」

優達は見たことのある金髪の美女を目の前に記憶を探索する。すると…

優・茜・ア「あ〜〜〜！！！！！」

霊「！？」

紫「ウフフ♪」

優・茜・ア「お前　（あんた）　（あなた）　は！」

優は紫に向かってずんずんと歩く。

優「お前！」

紫「ウフフ♪ゴメンなさい♪」

優「顔が謝ってねぇよ！つか、そんな変な物に乗ってねぇで降りてこい！」

紫「わかったわ。」

紫はスキマから出て降りてきた。

優「・・・」

紫「どうしたの？」

優「ちっちゃいな…」

紫「・・・」

優「それよりも、俺らに家を提供してくれるんだろ？」

紫「ええ。」

優「よろしく頼むぜ。」

紫「ウフフ♪」

〜続く〜

## 第7話　博麗神社　帰れないってどう言う事！？（後書き）

優達は住居をもらった。
次回は妖々夢編です。
お楽しみに。

## 第8話　春に降る雪の異変　その1（前書き）

ついに妖々夢編です。
またもや優達の活躍。
ではどうぞ。

## 第8話　春に降る雪の異変　その1

優達の住居にて

あれから6ヶ月…もう4月だっていうのに、雪が吹き荒れる。

優「寒…？」

茜「冬は好きだけど、さすがに長いよね。」

ア「確かに、4月だというのに雪が降っていまス。どう考えてもおかしいでス。」

優「じゃあ…い、異変だって、い…言うのかよ…？」

ア「ハイ。」

優「でも誰がやったのかわからないぞ。」

ア「それは…」

優「…わかった…行こうぜ、犯人を探しに！」

俺達は雪の降る寒空に出た。

優「う～…誰だよ…犯人はよ…」

？「待ちなさい、あなた達。」

何だか声がしたから振り返ると…

優「誰すか？」

？「私はレティ・ホワイトロック、あなた達こそ何者？」

優「瀧沢　優です。どうぞよろしく。」

青い服を着た女性に俺は挨拶をする。

優「で、なんすか？」

レティ「あなた達を「ここで永遠に眠らす　だろ。」え？」

～outside～

優「寒いからとっとと来い！」

レティ「…わかったわ。」
「寒符　リンガリングコールド！」

レティは優に弾幕を放つ。
その弾幕は放った直後に広がった。

優「・・・」

スッ

優は無言で弾幕を避ける。
レティの周りからも弾幕が放たれているが、優には一発も当たらない。

優「じゃあ…冬眠へ…」

レティ「そんな…」

優「GO。」

バコッ！

優は精一杯の弱い一撃でレティをのした。

優「ああ、寒い…行こうぜ。」

優達は飛んだ。

優「はあ～何かよくわからないけど、寒く無くなってきた。」

茜「慣れたんじゃない？」

優「かもな。」

ア「何か飛んで来ます！」

？「誰？あなた達？」

猫耳の中国の服を着た少女はそう聴く。

優「何だ？今度は猫ちゃんか？」

？「猫ちゃんじゃない！私は橙　（チェン）　て言う名前があるの。」

優「はいはい、言いたい事はわかったから、とっとと来い。」

橙「む…」

「仙符　鳳凰卵！」

橙はスペルカードを発動。

丸い形に広がる弾幕が優に当たる。が…

ドン！

優「はぁ～…眠…」

橙「効いてない？」

橙はとても驚いた。無理も無く、弾幕をくらって平気な相手は今だかつていないからだ。

優「どうした？終わりか？」

橙「まだ！」

「式符　飛翔晴明！」

橙は星の形を描くように翔ぶ。
かどを曲がった瞬間弾幕が放たれる

優「おお、速い速い。」

優は拍手しながら弾幕を避ける。

橙「そんにゃ…」

優「はいはい、次は？」

橙「にゃ！」
「天符　天仙鳴動！」

橙は翔びまわりながら弾幕を放つ。

優「んじゃ…」

スバッ

橙「にゃ？」

優「終わりな。」

バシッ！

橙は優のパンチで気絶、真下の森へ落ちていった。

茜「弾幕くらったけど、大丈夫なの？」

優「よくわからないけど、大丈夫だった。」

ア「行きましょう、優さン、茜さン。」

優達は再び飛ぶ。

優「そう言えば、茜は能力で飛んでるんだろ？」

茜「うん、（四聖獣を操る程度の能力）　で、青龍の力を使っているの。」

優「アントニーは一目瞭然だな。」

ア「僕は足のジェットで飛んでまス。」

優達がそんな会話をしてると…

？「ちょっといいかしら？」

水色のドレスのような服を着た金髪の少女が突然現れ、そう聞く。

優「何でしょう～か？」

？「あなた達は異変を解決しようとしてるのかしら？」

ア「そうですガ…」

？「ならあなた達の実力を試さしてもらうわ。」

優「…すまないアントニー、代わり頼む。」

ア「ハイ、わかりましタ。」

優「行こうぜ、茜。」

茜「頑張って。」

ア「さて、始めましょうカ…」

？「ええ。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

？「私はアリス・マーガロイド、行くわ。」

「蒼符　博愛の仏蘭西人形！」

アリスはスペルカードを発動。
アリスの周りから人形が現れ、弾幕を放つ。

ア「なるほど、やるべき事ハ…」
「眼撃　アイレーザー！」

アントニオンは目からのレーザーで、人形を焼き消す。

アリ「く…なら…」
「魔符　アーティフルサクリファイス！」

ポーン

ア「？」

アリスは人形をアントニオンに放り投げる。
すると…

ドガーン？

ア「ウア？」

突然人形は爆発した。

アリ「もう一回…」
「魔操　リターンイナニメトネス！」

ビュン

ズガーーン！！！

今度の爆発はさっきより強力な威力。

ア「うぐっ…！」

アリ「切り裂いてあげる！」
「戦操　ドールズウォー！」

アリスは数体の人形を出し、人形は武器を構える。そして…

ズババババッ？

人形がアントニオンを切り裂く。

アリ「悪く思わないでね。」

ア「その心配はいりません、僕はサイボーグですから。」

アリ「え？」

アリスは驚いた。その理由は生きていた事と…この世界の物の姿をしてないと言う事。

アリ「あなた、一体何者？」

ア「僕はアントニオン・ライブラリー、サイボーグでス。」

アントニオンの姿は、服は少し切れているが、皮膚の部分は切れ、特殊合金が露になっている。

ア「今度は僕の攻撃でス。」
「爆撃　ミサイルボンバー！」

アントニオンの撃つミサイルが人形をぶっ壊す。

ア「ちゃんと守って下さイ！」
「爆閃　マインド・クラッシュ！」

パチン

シュー…

アリスのはるか下の地面に光が発せられる。
そして…

ズガーーーン！！！

大爆発が起こり、アリスを呑み込む。

アリ「うあああぁぁぁ！」

アリスは地面に落下した。

ア「急がないト…」

その頃、優と茜は…

優「何か空間の穴があるぞ。」

茜「きっとあそこが…」

優と茜が穴に入ろうとすると…

バッ！

優「うわ？」

茜「何？」

突然優達の前に一発の弾幕が飛んできた。

？「それ以上はダメ。」

？「あなた達人間がくる場所じゃないよ。」

？「だから帰ってくれない？」

優「む・り・だ！」

茜「同じく。」

？「なら追い払うだけね。」

三人の女性？少女のようだが、

一人は黒い服の金髪
二人目は白い服の白髪
三人目は赤い服の黒髪
それぞれが楽器が持っている。

？「私はルナサ、ルナサ・プリズムリバー。」

？「私はメルラン。」

？「リリカだよ♪」

優「俺は瀧沢　優。茜、ここは俺に任せて、行け。」

茜「わかった。」

優「さて、始めるか。」

ルナ「じゃあ…」

「弦奏　グァルネリ・デル・ジェス！」

ルナサは楽器を演奏する。
それにより、音符が現れる。
そして音符が弾け、弾幕が放たれる。

優「簡単だなっと、うぁ…！」

優は弾幕を簡単に避ける。が、突然苦しみだす。

メル・リリ「じゃあ、三人で行くよ。」
「騒符　ファントムディニング！」

ルナサ、メルラン、リリカが三人に集まり、演奏し、音符を放ち、
音符が弾けて弾幕が放たれる。

優「う……」

優は動かない。ルナサ達の弾幕が当たろうとした時…

ドン！

直撃！かと思いきや…
弾幕は直前で何か遮られたようだった。

優「フフ…フフフ…」

ルナ「？」

メル「？」

リリ「？」

優「ハハハハハハ！！！」

優は狂ったように笑いだす。
その時の目は赤黒く光る。

優「よう……俺は、こいつの　（闇）　だ…」

ルナ「闇？」

優「お前らはラッキーだ…この俺に殺されるんだからな…」

ドバーーーン！！！

瞬間、優の身体から黒い気が放たれる。
不敵に笑うと…

シュバッ

優「ハハハ…」

あり得ない速度でルナサ達の目の前に現れる。優の後ろには残像が残っている。

ルナ「？」

メル「？」

リリ「？」

優「波動　波動百烈拳？」

優は黒い波動拳を百発撃つ。
黒い波動拳はルナサ達に直撃！

ルナ「うあああ？」

メル「あああああ！」

リリ「わあああ？」

ルナサ達は落ちた。

優「ハァ！」

優は闇から抜けていた。

優「あれ？何が…」

優は何が起こったかわからず、そのまま茜の後を追った。

ア「優さ～ン！」

優「おーアントニー、速く来い！」

後から来たアントニオンは優と上空の空間の穴に入った。

〜続く〜

## 第8話　春に降る雪の異変　その1（後書き）

次回は見知らぬ地へ…
空ですから…
ではまた次回。

## 第9話　春に降る雪の異変　その2（前書き）

いよいよ空の上の世界に…
そこでの剣士　対　剣士の闘い、ご覧あれ！
ではどうぞ…

## 第9話　春に降る雪の異変　その2

霊界？にて

茜「暗いなぁ…」

茜は見知らぬ場所にいた。
茜が歩いていると…

茜「何これ？」

茜の目の前には途轍もない程長い階段があった。

茜「上れば…」
「能力・白虎！」

茜に白い何かが当たると…

茜「よし。」

タタタタタッ

茜は疾風の速さで階段を上る。
その長い階段をどんどん上り、そして階段が終わる。

茜「うわ～…」

茜は驚いた。その光景はただ美しい物だった。
と、光景に見惚れていると…

？「ちょっとよろしいですか？」

目の前に現れた少女はそう言う。
彼女は銀髪の緑色の感じの服、
後ろには白い魂が浮かび、
背中と腰には刀がある。
茜と同じ剣士のようだ。

？「人間がここに何の用ですか？」

茜「異変解決…て言えばわかるでしょ。」

？「なるほど、把握しました。」

少女は素早く刀に手をかける。

茜「の…前に自己紹介と、ここが何処か教えてくれない？」

茜の問いに、少女は刀から手を離す。

？「いいでしょう。ここは冥界、幽霊が集まる場所です。そしてあの屋敷が白玉楼　（はくぎょくろう）　、私はそこで働いている魂魄　妖夢　（こんぱく　ようむ）　です。」

茜「私は大島　茜、見ての通りの外来人。
そして…龍虎二刀流の伝承者。」

妖「龍虎二刀流…同じ剣士と言う事ですか…
なら、相手にとって不足無し！」

茜「それじゃ…」

茜と妖夢はともに刀を構える…
そして…

茜・妖「はぁぁあああ？」

ガキン？

茜の刀と妖夢の刀がぶつかり合う。

茜「やるね！」

妖「さすがですね、この楼観剣（ろうかんけん）と白楼剣（はくろうけん）を思い切り振るえる日がくるとは。」

茜「私だって、朱雀、玄武、白虎、青龍や無幻の全部を使えるんだから。」

茜と妖夢はそう言う。

妖「行きますよ！」
「人符　　現世斬！」

妖夢はスペルカードを発動。
楼観剣を鞘に居れ…

スバーーン？

居合いの一閃？目にも止まらぬ速さで茜に向かう。

茜「速いけど…」
「二天一流の極み！」

茜は妖夢の動きを見る…
そして…

茜「見えた？」

カキン！

左の刀で妖夢の攻撃を払い、

バシッ！

回転し、右の刀の峰で妖夢を叩く。

妖「うぁ！」

妖夢はよろめくが、すぐに体制を立て直し…

妖「魂魄　幽明求聞持聡明の法？」

妖夢の体が分裂するようになる。

妖「はあ？」

茜「？」

茜は妖夢の斬撃を避けるが…

スバァーン

茜「あい…た…！」

茜の腕に切り傷が…

妖「避けても、避けきれないですよ、この技は。」

茜「避けても…切れる。」

妖「気を引き締めてください！」

妖夢は再び斬りかかる。

茜「能力・青龍！」

茜は妖夢の攻撃と同時に飛び上がる。

茜「よし切れてない…て事は…」
「斬撃が二回に増えてるだけ！」

茜はそう理解すると…

茜「白虎、あなたの出番だよ。」

茜は名刀　（白虎）　を取り出す。
鞘から抜き出し…

茜「切り裂け？白虎？」

妖「剣伎　　桜花閃々！」

茜と妖夢は突っ込む、そして…

ズババン！！！

茜の攻撃が通る。斬撃は三回、三回の斬撃が妖夢を切り裂く。

妖「あぅ…」

茜「これで同じね。」

茜と妖夢は同じ傷を負った。

妖「まだです！」

「人鬼　未来永劫斬！」

妖夢は居合いの構えをとる。

茜「じゃあ…」
「舞斬　玄武水舞？」

茜は名刀　（玄武）　を持ち、回転しながら刀から水を放つ。
そして…

ズバーン！

茜「あっ！」

茜が妖夢の攻撃で舞い上がる。

妖「隙あり！」

茜「まだ？」
「次元斬！」

ジャキン

スパーーン？

妖「？」

妖夢は紙一重で次元斬をかわす。

茜「はぁああ！！！」

妖「くっ…！！！」

茜と妖夢は刀をぶつけ合う。

ガキン？

ギャン？

シャキン？

それぞれの刀がぶつかり、音が鳴り、斬撃が現れる。
二刀流の達人同士が戦うと途轍もない物になる。周りの物体は斬撃の衝撃波でバラバラになり、足場はひび割れ、瞬間的な空気圧の低

下で周りの温度が下がり、氷が現れる。

ガキン！！！

茜「はぁ、はぁ、はぁ、強い…」

妖「はぁ、はぁ、はぁ、あなたこそ…」

茜「次で決めようか。」

妖「そうですね。」

茜と妖夢は刀を構え、力を溜める。
そして…

茜「これで…」
「龍虎二刀流　龍虎二天閃！！！」

妖「決める？」
「空観剣　六根清浄斬！！！」

妖夢は茜を囲むように六人に分裂する。
茜は持っている刀の全てを浮かし、背中に構える。
そして…

茜・妖「はぁぁぁあああああ！！！！！」

一閃！！！！！

ジャキキキーン！！！！！

茜は妖夢の後ろに、妖夢は茜の後ろに…
それぞれが刀を前に振り抜いていた。

妖「あぁ…」

バタン！

倒れたのは妖夢、茜は戦いに勝った。

優「お～い！茜！」

ア「無事ですカ～？」

優とアントニオンが階段を上ってきた。

茜「ふふ…遅いよ！」

優「ゴメンな～、階段が長くてよ～。」

？「それはゴメンなさいね。ウフフ…」

～続く～

## 第9話　春に降る雪の異変　その2（後書き）

ついに異変の犯人登場。
その正体とは…
ではまた次回。

## 第１０話　春に降る雪の異変　その３（前書き）

ついに冥界と白玉楼の主の登場。
優がなんと…
ではどうぞ。

## 第１０話　春に降る雪の異変　その３

冥界にて

優「その声、あんたがここの主であり、異変の犯人　て事か？」

？「そうよ…私が幻想郷の春度を集めた、
西行寺　幽々子　（さいぎょうじ　ゆゆこ）　。」

おしとやかな桃色の髪の女性は浮遊しながらそう言った。

優「なぜ春度を集めた？」

幽「あれを見て。」

女性はそう言い、持っている扇で指し示す。
その方向には…

優「木？」

茜「ただの木じゃない…」

ア「見てくださイ！あの木、何かを吸っていまス。あれガ…」

幽「そう、吸っているのは春度。私はあの西行妖　（さいぎょうあやかし）　をもう一度咲かせたいのよ。」

西行妖と言う木は春度を吸って、桜の花を咲かせている。
が、満開ではなく、後少しのところで止まっている。

優「　んな事はいい…大事なのは…　（怒）　」

幽「？」

優「とっとと春を返しやがれ！！」

茜「ゆ、優？」

ア「優さン？」

優「こっちは寒くて寒くてたまんないってのに、そっちは春を集めてよ！何だ？宴会でもすんのか？たくよ、許可無しに春を取りやがって？本来は冬眠から目覚める動物も目覚めねぇだろうが？この迷惑野郎？」

幽「…そんなの「ほう、白を切るのか。なら…」　？」

優「ぶっ倒す！！！」

優はキレた。

優「茜、アントニオン、ここは俺一人でやる。下がっていろ。」

茜「う～ん…わかった、好きにして。」

ア「え…あの…「ほらほら、サイボーグでも怪我するよ。」え？」

茜はアントニオンを連れて下がる。

優「本気で来い！じゃねぇと…死ぬぞ、お前。」

幽「わかったわ。」

幽々子は理解したように一枚のスペルカードを取り出し…

幽「幽雅　死出の誘蛾灯！」

優「な、何だ？弾幕が迫るだと？」

優の周囲に桜の弾幕が現れ、優に迫りよる。

優「と、思ったけど、こういう弾幕知っているから問題無い。」

サァッ

優はそう言うと、音を超えるスピードで弾幕から抜け出す。

優「ふんっ…」

幽「手応えがありそうね。」
「亡郷　亡我郷ー自尽！」

幽々子はゆらゆらと揺れる弾幕を放ちながら時折レーザーを撃つ。

優「魅せる弾幕か…本気だせって言ってんだろ！！！」
「飛龍　翔龍波！！！」

ドォーーーン！！！

優は波動の龍を放つ。
龍はこれまでにない速度で幽々子に向かう。

幽「龍？いいわね、それ。
私も本気をだすわ。」

幽々子は全身から妖力を放つと、
突然…

パーーーン

幽々子の後ろに巨大で綺麗な扇が現れ、広がる。

幽「行くわよ。」

幽々子は容赦の無い美しい弾幕を放つ。

優「ふっ…いいぜ！」

スバッ　スババッ

優も幽々子の放つ弾幕を華麗に避ける。

幽「ウフフ。」
「亡舞　生理必滅の理ー死蝶ー！」

幽々子は弾幕で大きな円を描くように放つ。
大玉弾幕も同時に撃つ。

優「全部消しちまうか…」
「波動　波動百烈拳！！！」

百発の波動拳を放ち、幽々子の弾幕を相殺。

幽「ウフフ、さすがね。紫が一目置くだけあるわ。あなたに見せてあげる。」

「反魂蝶　ー一分咲ー？」

パァーーーン？

幽々子は全妖力を解放し、スペルカードを発動。
幽々子は次から次えと綺麗な桜の弾幕を放つ。

優「す…すげぇ…」

その美しさに優は見惚れ、避けるのを忘れる。

幽「終わりね。」

バァン！！！

優「何？」

幽「私の能力は（死を操る程度の能力）、あなたに死をあげる。」

その瞬間…

優「！！！」

優の動きが止まり、そのまま落ちそうになる。

優「！！！　（苦）　」

優の目が閉じ、ゆっくりと仰向けになる。

茜「！！！」

ア「！！！」

幽「さよなら…」

優「はぁ…」

優が死ぬ、その時…

優「・・・」

幽「！！！」

優は落ちずにその場にとどまる。

優「フフ…」

優はゆっくりと体制を直す。
顔が下向きになり、優が顔を上げる。

優「一つ言い忘れてた。」

幽「…何？」

優「俺の能力は
（自分の害なる物全てを　無　にする程度の能力）　と
（見た技全てを自分の物にする程度の能力）　だ。」

幽「？」

優「いや～正直能力でも危なかった。強いな…幽々子様よ…」

ズギャーーーン！！！

「久しぶりに本気を出せそうだ！」

優は全身から気と波動を放つ。
巨大な気は幽々子を圧倒していた。

幽「これが紫の言ってた…彼の力…」

優「行くぞ、幽々子。」

ズバッ

優は音速超えるスピードを超えるスピードでダッシュする。
つまり…

光の速さで翔んでいる。

優「遅えぞ！！！」

幽「？」

優が幽々子の場所まで　０．１秒。
優の出したスピードにより、ソニックブームが発生する。

ジィーーーン！！！

幽「きゃああ！！」

幽々子はソニックブームに吹っ飛ばされた。

幽「…やる…わね…これで最後よ！」

「反魂蝶　ー八分咲ー　！！！！」

幽々子は逃げる隙間が無い程の美しい弾幕を放つ。

優「綺麗だけど…」

シュンッ！！！

優は弾幕が張り詰められた場を抜け、幽々子に向かって…

優「んじゃ…」
「桜龍　龍桜　（ドラゴンさくら）　！！！」

優は拳に力を溜め、地面に殴りつける。
すると、地面から美しい桜の龍が飛び出し、幽々子に直撃する。

ズバーーン！！！

幽「きゃあああぁぁ！！！」

幽々子に直撃後、さらに飛び、綺麗に咲き誇り散った。

ドサッ

幽々子は西行妖の前に落ちた。

幽「…あ…ぅ…」

優「恵みの波動。」

優は幽々子に近づき、優しい波動を放つ。

優「大丈夫か？」

幽「ウフフ…やられちゃったわね…」

優「桜龍は魅せる技だぜ、本気だったから威力があったが…」

優「春度を返してくれるか？」

幽「…ウフ…わかったわ。」

優「サンキューな！」

優は幽々子の手を掴んで立たせる。

優「じゃあな。」

幽「また、戦いましょうか。」

優「ああ。」

優は茜とアントニオンのとこへもどろうとすると…

スーー

優「ん？あ！うわ！！！」

スーー

茜「優？」

ア「優さン？」

幽「紫…」

〜続く〜

## 第１０話　春に降る雪の異変　その３（後書き）

何かに吸い込まれ、姿を消した優。
一体何が？
ではまた次回。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3392x/

超絶で最狂の三人が幻想入り

2011年10月20日09時15分発行